

Go Go バスの旅

ダクシンカリへの道再発見

「月刊ランナース」主催の「10月月間走り込み大会」にエントリーしたため、10月はカトマンズー香港ー東京・岐阜とまたにかけて走り込んだ。7～8月の一時帰国中に身につけた5 kgの体重は、200kmを走り込んだ結果かなり減量され、衰えが懸念された足腰の強化とともに、走り込みの成果として胸が張れる結果を出せたと思う。

その過程で、新たな発見もあった。カトマンズでの走り込みは、主にダクシンカリ道路で行う。運転手のクリシュナが出動の日曜日は、ダクシンカリ寺院のゲートまで車で送ってもらい、そこから帰路16kmを走るという練習方法をとれたが、クリシュナが休日である土曜日を有効に使うため、ダクシンカリ寺院までバスを利用する手段を初めて用いたのである。

ダクシンカリはヒンドゥー教の女神カーリーを祭った寺院。カーリーはシバ神の妃神で、殺戮、血を好む暗黒の神である。ダクシンカリへは、毎週火曜日と土曜日の午前中にカトマンズ周辺のヒンドゥー教徒が女神への生け贄に山羊やニワトリを持ち込み、次々と首を切り落とす。境内は血の海。異教徒は境内には入れないが、その光景を外から見るができる。

そんなダクシンカリ行きの交通手段として、バスは10ルピー（約20円）で運行されている。土曜の早朝はバスが混み合い、リングロードで乗車する私が車内に入り込むスペースは殆どない。だから、バスの屋根に上り、荷台に乗ることになる。車掌係の兄ちゃんが2人くらい乗車しているが、混み合った車内を回ることはできず、乗客は降りる時に料金を徴収する。しかし、荷台に限って言えば、先に兄ちゃんが料金徴収に上って来るので、行き先を告げて料金を払い、チケットを受け取る。目的地に着いたら降りるだけだ。

荷台の乗り心地？今年の寒さは例年より1カ月以上早く訪れてきており、今のカトマンズは朝8時台でも霧に包まれていることが多い。だから、荷台はとても寒い。しかも、バスは途中で何度も停車するため、リングロードからダクシンカリまで1時間30分もかかる（因みに、私が走ってリングロードまで戻るのもやはり1時間30分程度である）。だから、本音を言えば荷台はあまりお勧めはできない。救いは、混雑した車内に無理して乗ると、スリの餌食になりやすいことだ。女性だと痴漢の心配もある（あまり知られていないが、ネパール人男性はけっこうスケベである）。また、排気ガスで臭いと感じる道も約2m上で空気を吸えばいくらかましな気がしないでもない。

荷台でのバスの旅も一度やってみたら面白いかもしれない。でも、荷台の上から道路を見下ろすと、特に道幅の狭い山岳地帯を走る時は、我が命を運転手に預けねばならない。路側すれすれを走られると、寿命が縮む思いがするのである。

ネパール人よお前もか

ある国際線機内での出来事

突然だが、ネパールに赴任して以来、私はインド人が嫌いになった。いや、もっと正確に言うとインドの高所得階級や中産階級が嫌いになった。本当に裕福なインド人は欧州にバカンスに行くが、それより若干貧しい階級は、リゾートというネパールにやって来る。彼等の行状は想像を絶する。スーパーでの駄菓子買い占め、我侭放題の子育て（インド人の子供はデブがやたら多い）、ツインの客室に4～5人で泊まり夜更けまでどんちゃん騒ぎ。ポカラ辺りのホテルのオーナーはインド人を泊めるのを嫌がる人が多い。それくらい彼等の行動は響きを買っている。それでも彼等は周りの迷惑を全く省みない。

私は、10月上旬から始まったダサイン休暇中、末弟の結婚式に出席するために一時帰国した。その帰路、成田から香港までの機内で、私は運悪くインド人観光客の前の席になり、彼等の大声での会話を3時間以上にわたって耐えねばならなかった。皆さん、香港線のエコノミーはお勧めしません。周りはインド人とベンガル人ばかり。彼等の騒々しさに比べたら中華民族なんて奥ゆかしいものである。

それでも香港線は空いていたからよかった。問題は香港で乗り継いだカトマンズ行きのロイヤルネパール航空機（RA）である。先月号でもお伝えしたように、この時期のカトマンズ便は非常に混雑する。私は、混雑の原因は外国人観光客が多いからかと思っていたが、ダサイン休暇に限って言えば、外国旅行のネパール人観光客の方が圧倒的に多い。彼等は大きな荷物も機内持ち込みにするため、自分の座席の上のキャリヤーでも荷物が納まらない。そこで、たとえ他人が座る筈の席のキャリヤーでも、空いていればそこに座るべき客が来る前にさっさと荷物を押し込んでゆく。後から来た乗客ほど悲惨な思いをする。少しでも空いているスペースを求めて、狭い通路をウロウロ徘徊するか、座席の下の僅かなスペースに荷物を置くことになる。幸い通路側の席を確保していた私は助かったが、通路側の乗客が荷物を膝元に置いていたら悲惨である。5時間強のフライトの間、トイレに立つこともままならない。もっとも、図太いネパール人ならそれでも平気で席を立つだろうが。

もう1つ困るのが、通路で遊ぶフソガキとそれを叱りもしない親である。こちらが寝ていてもお構いなしに通路を走り回り、両側の乗客の肘に体当たりするは足は踏むは、よっぽど怒鳴りつけてやろうかと思ったが、以前それを敢行してその子供の親と喧嘩になったJICA専門家の話が脳裏をよぎり、私は我慢したのであった。ガキもガキなら親も親である。子供を他人に叱られて腹を立てる以前に、親としてやるべきことがあるだろうが！

よく見れば、乗客の殆どがバフン、チェットリーといった上位カーストか、グルカ兵や登山ガイドで財をなしたグルン族、シェルバ族の人々であったが、騒いでいるのはインド人と先祖を同じくするバフンやチェットリーの連中で、グルンやシェルバの人々は静かに乗っていた。やっぱりインド系は嫌いだあ！

JICAの業務の1つに技術研修員受入というのがある。途上国の政府職員を日本や他の途上国(中進国やアセアンが多い)に派遣し、技術研修を受けてもらうもので、日本での研修は全国13ヶ所にあるJICAの研修センターをベースにして行われている。研修員受入とは別に、「21世紀の友情計画(青年招聘事業)」という、途上国の未来を担う青年達を日本に招聘して日本の青年との交流を深めてもらうというプログラムも実施されている。

両者とも、日本シンパを沢山作るというメリットは確かにあるし、一部の技術や技能については、日本で研修受講することは確かに途上国の技術向上に役立つと思う。しかし、こうした「光」の部分の他に、後進国ならではの「陰」の部分が存在することは意外と知られていない。サッカーW杯アジア1次予選のために来日したネパール人サッカー選手が日本で失踪した話は記憶に新しいところであるが、同様な失踪騒ぎがネパールから派遣された研修員の中にも度々起きている。それも一度や二度の話ではない。最近では年平均3回は発生しており、ネパールの悪名はJICA本部にも知れ渡っている。

なぜ起きるのか。原因を突き詰めれば日本とネパールの経済格差に端を発している。日本国内にはネパール人来日研修員にアプローチを図り、職の機会を提供するネパールシンジケートが存在していると言われている。シンジケートに誘われて、さんざん迷った研修員は、研修終了した日本出発前夜、ホテルから忽然と姿を消す。そして暫く日本で働いて、カネがある程度貯まったら、ネパールに戻ってきて職場に復帰する。職場は有給休暇扱いとなっているので、帰国研修員を平然と受け入れ、こちらでの仕事が再開される。彼の家は改装や建て増しで立派になっている。お役人の意識なんてこの程度なのだ。

去年、私がわざわざ出発前オリエンテーションに同席までして、「日本は今季節の変わり目だから体には気を付けろよ。」と親心を示してやった相手が失踪したと聞き、裏切られたと思った。そのネパール人はそれから8カ月後に職場に復帰して堂々と仕事をやっていると聞くと、私の怒りは頂点に達し、今後の見せしめのために、土壌保全局長に直談判して懲罰人事を執行させたのであった。しかし、この件での土壌保全局長の当初の対応はひどいもので、「研修がバングラデシュで行われていたら失踪騒ぎなんて起きなかったのね。」と薄ら笑いすら浮かべて平然と言ったものだった。

研修員の失踪騒ぎは、9月に来訪した政策協議ミッションのネパール大蔵省との協議の議題の1つにも取り上げられ、日本の懸念を伝え、適正な人材選定と再発防止策の検討等の点での関係省庁への指導徹底を大蔵省も約束した筈だった。ところが、9月末になって、今度は青年招聘プログラムで派遣中だったタナフ郡の小学校教師がまたもや失踪した。

日本にあるネパールシンジケートを撲滅しない限り、この手の失踪騒ぎは今後も続くだろう。いっそのこと日本での研修を無くしたらどうかとさえ思う。ネパールと日本ではテクノロジーのレベルが違い過ぎて折角修得してもネパールには応用できないという話もよく聞くと、無理して日本で研修やらなくてもタイやインドネシアで研修受けさせた方がネパールのためにはよほど良い。日本シンパなんてできなくてもいいじゃないか。研修員にみすみす失踪される方がよほど税金の無駄である。

ひょっとして、胃潰瘍?

「サンチャイ」と言うには体調ほど遠く・・・

私は普段昼食を自宅で食べることは少なく、外食か昼飯抜きかで済ますことが多いが、ダサイン休暇も間近に迫った10月初旬のある日のこと、昼食をとるために珍しく昼休みに帰宅したことがある。朝の食べ残しのネパール食があったので、食べてしまおうと考えたからである。いつもの如く大皿に全部の料理を盛ってレンジでチンしてスプーンでかき込み、居間のソファで横になって居眠りを始めた。しかし、その眠りも、やがて襲い来る胃の痛みでさまたげられることになった。

腹をこわした訳ではない、下痢もない。ただただ胃が痛くて、冷や汗がにじみ出た。無理して事務所には戻ったが、あまりの痛さにろくに動くこともできず、机に腰掛けてデスクワークに集中することもできなかった。盲腸でないことはすぐわかった。まさしく胃が痛いのである。今までこんな痛みは経験したことがなく、一体どうなるのかと不安に襲われた。

辛い胃痛は2時間程で治まった。でも、心配になった私は事務所の医療調整員である中前さんに相談を持ちかけた。

「それは胃潰瘍のなりかけ。刺激の強い食べ物を食べてたでた胃壁がSOSを発しているんです。」

言われてみれば、美澄のいない過去数カ月間、私はKCの作ってくれたネパール食ばかり食べていた。ただでさえKCの料理は香辛料が効いていて辛いのに、9月は仕入れたクルサニ(唐辛子)がことのほか辛く(新鮮なクルサニほど辛い)、それを無理して冷茶でかき込んで食べていたのだ。胃壁がただれても当然である。

その後も時折同様の胃痛を経験し、一時帰国中は過去2回出場回避を余儀なくされていた「あざいお市マラソン」(滋賀県浅井町)に3度目の正直で出場を狙っていたのに、当日朝に胃痛を起こし、二度あることは三度あるになってしまった。中前さんから奨められ、「マーロックス」という胃薬を仕入れてネパールに帰ってきた。確かに効く感じはするが、いちばん大事なのは刺激物を食べないことだ。とは言うものの、美澄が戻ってくる11月上旬までは多少なりともネパール食を食べざるを得ず、暫くは胃痛との共存を図らねばならないと覚悟している。

ところで、9月はコテツも皮膚病を起こし、毎週末医者に連れて行って注射を打っている。ダニに血を吸われて掻き壊したのが原因と言われているが、最近、ニワトリを庭に放す時間が多くなり、鎖に繋がれるのに慣れていないコテツもストレス貯まっているのかもしれない。主人が主人ならイヌもイヌ、「サンチャイ通信」のネタとしてはお粗末なばかりである。

編集を終えて・・・

★10月の一時帰国での出来事を1つ。半年以上前に予約完了して後は乗るばかりとなっていたカトマンズ～香港のRA便がフライトキャンセルの可能性ありと出発前日に聞かされました。RAは自前の機体を2機しか持たず、外国からリースした機体と合わせて自転車操業を行っていますが、10月上旬そのうちの1機がシンガポールからの帰路故障を起こしてバングラデシュのダッカに緊急着陸、暫くカトマンズに戻って来なかったそうです。幸い私のフライトは4時間遅れで飛んでくれましたが、この遅れで香港の友人と6年振りに会って夕食を共にするという予定はキャンセル、わざわざ香港経由にした意味がなくなってしまいました。この時期いったんキャンセルされたら代替フライトを確保するのは難しく、美澄や岐阜の両親、結婚を予定していた末弟などに多大な心配をかけました。フラッグキャリアにしてこの有り様です。情けない。(浩司)